

聖誕七百年紀念

# 棲神 第十號

祖山學院同窓會

## 卷頭の感

本年は實に不思議な年である、而も此日本國に於て何れも法華經に關係ある聖德太子、傳教大師、日蓮聖人の御三師が御揃ひになつた不思議な年である、其中で聖德太子は千三百年、傳教大師は千百年、宗祖は七百年である何れも法華經に關係ある所以は、聖德太子は勝鬘經維摩經法華經の三部を以て鎮護國家の寶典とせられたのである、而も三部の内では勝鬘經と維摩經の二經は畢竟或る特殊の因縁を以て御用ひになつたのであるが中心として最も大切なものは法華經であつたことは勿論である。此のことは太子の御傳記が明らかに證明してゐる、のみならず法華經に就ては支那からわざわざ御取寄せになられた

のであつて其邊から見ても法華經中心なることは言はずもがな。委細に云へば勝鬘經は全く勝鬘夫人の事蹟を御説きになつたもので、時の推古帝が女帝で在らせられた御因縁をもつて御講讀に相成り、維摩經は在家有髮の居士の身を以て而かも佛法弘通する邊より御自身に倣へて講疏遊ばされたものである然し乍ら論議多々ありと雖も國家鎮護の法とすべきは勿論法華經である、從て太子は資生產業皆與實相不相違背を根本として政治萬端、凡て法華經實相の理より割り出して御用ひになつたことは分明である、此事に就ては諸學者又相一致せる太子觀である。

次に傳教大師は既知の如く天臺宗を支那から傳來したお方である。法華經を以て依據とし四宗融合と云つて眞言、禪、戒律を併用せられたが、是等は以偏助圓の意から三宗を併用せられたので、中心は終始一貫して法華經主義であつた。

扱て此の本化の宗旨は改めて云ふ迄もないが同じ法華經を以て出離生死のみならず此を國家の上にて用ひて根本經典としたことは三師一貫した所である。

此の三大偉聖が不思議にも揃つて記念祭を迎へたと云ふことに就て本化の宗祖は一會深刻に思考すべき何等かの表徴を認めるであらう、外でもないが法門上に於て一代聖教三重配當と云ふ教相がある、その法門は昔迹本の三を滅後正像三時に配當する、そこで爾前經たる昔教は正法時代の教である、次に迹

門は像法に弘通すべき教で本門は勿論末法である、其上正法時代に行はれた教は像法に來れば無益に成り、又末法に來ると正像二時代に於て行はれた教法は利益を失つて無用となる、只本門の教法のみ流布すべき時代である是が昔迹本一代三重の法門である。

茲に不思議を感ずる事は三師共に紀念に當つてゐるが前二聖は御入滅の記念で悲しい紀念である、然るに吾祖は御降誕と云ふ目出度い嘉辰を迎へたと云ふ事は何を表徴するか、夫は彼の傳教大師は像法の人、弘布の法は迹門の教、聖德太子に至つては勿論である、即ち兩聖共に法華經本門の立脚地でないことは誰人も異論がないのである。

聖德太子傳教大師の出世時代は像法であつて、其時代に弘法すべき人が末法に來て悲しき紀念となるとは畢竟像法時代に行はれたる法が末法に來つて利益を失ふと云ふ事を表徴するものではなからうか。

吾祖は降誕である、末法應時別頭の大法を盛んに弘布せられて末法萬年の闇を照す大導師と忝けなくも仰がれ纏て本門戒壇建立の曉を見るとは實に有難き紀念と拜し奉ることである。(文責在記者)